

『愛のあるキャッチボール』

(紀の川市最優秀賞受賞・和歌山県大会入賞)

打田中学校 3年 谷口 くらら

「行ってらっしゃい。」

学校へ行く時、遊びに行く時など、家を出る前に私と母が必ずするやりとりです。

小学生の頃は特に何も感じていなかったやりとりですが、中学校へ入学してすぐに反抗期に入った私は、毎日欠かさずするこのやりとりが恥ずかしくなっていました。そんな小さな理由から、私は母のこの言葉に対して、嫌々返していた時期がありました。

中学1年のある日、朝から母と喧嘩をした事がありました。気分が悪くなった私は、母と口を利きたくなくなったので、いつもより早く支度を済ませて家を出ることにしました。足早に玄関へ行こうとした時、母はいつもと変わらず、「行ってらっしゃい。」と私に声をかけてきました。私は混乱しました。母が一体何を考えているのか、分からなかったからです。

混乱した私は、人生で初めて母の「行ってらっしゃい」を無視して家を出ました。学校へ行っても、朝の玄関での光景が頭から離れませんでした。どれだけ悩んでも、なぜ母があのような状況であのような言葉をかけてきたのか、分かりませんでした。学校が終わる頃には、せっかく声をかけてくれた母を無視してしまった罪悪感が1番大きくなっていました。家に帰ってすぐ、ためらいの気持ちを捨てて、母に謝りました。その頃には、喧嘩の内容なんて正直覚えていませんでした。頭にあるのは、玄関で無視をした自分への後悔、それだけでした。謝ったあと、聞きました。

「どうしてあの時も、いつも通り行ってらっしゃいと声をかけてくれたの。」

母は悩まず答えてくれました。

「行ってらっしゃいには、行って無事に帰ってきてね、という意味があるからだよ。」

私は思わず、ハッとしました。いつも何気なく使っていた短い言葉に、これほど深い意味が込められていたのか、という驚きと、そんな気持ちがこもった大切な言葉にしばらくの間、嫌々応えてしまっていた自分への惨めな気持ちでした。

私は、この出来事を通して、人と人との何気ない小さなやりとりこそ、大切にすべきだと気づきました。『会話のキャッチボール』という言葉がありますが、それは一方的な話ではなく、相手の言葉を理解して、それに対して自分の考えを返答する事で、会話がスムーズに成り立つ状態のことを言います。しかし、これでは言葉を受け取った人が気持ちを読み取ろうとせずに、適当に言葉を返して

会話が成り立つと『キャッチボール』が完成してしまうので、最も重要なことが足りていません。必要なのは、何気ないやりとりを、『会話のキャッチボール』で済ませず、少し発展させた、『愛のあるキャッチボール』でやりとりすべきだと思います。『愛のあるキャッチボール』が成り立つ瞬間は、投げる人は、言葉に気持ちを乗せるようにして、言葉を受け取った人はその言葉に込められた気持ちを丁寧に受け止めて、できる限り込められた気持ちを読み取ろうと努める事が出来た時。愛のあるキャッチボールをするには、双方に愛が必要です。愛があるのとないのとでは、やりとりをする場の温かさが大きく変化します。場が温かくなると、互いの気分が良くなります。そんな何気ない短いやりとりを大切にする事が、相手との関係をより良くする鍵になるかもしれません。

その大切な事に気づいて以来、私は家を出る時も躊躇なく、返事ができるようになりました。だから、この習慣をなくさないために、今日も、明日も、これからも。家を出る時は丁寧に、気持ちを乗せて。

「行ってきます。」

